

日本太陽エネルギー学会の あるべき姿について

What the Japan Solar Energy Society should be.



光田憲朗*

2011年度に関西支部の幹事に、2014年度に関西支部の副支部長と理事に、2016年度に副会長に就任。2018年度には関西支部の支部長をも拝命し、ずるずると、本学会の中枢に引き込まれ、いつしか、『日本太陽エネルギー学会のあるべき姿』について真剣に考えざるを得ないようになりました。

もちろん、理事会、各種部会、各種委員会や関西支部の皆さんは、全くのボランティアで、本学会と本学会員のためにと、日々涙ぐましい努力をされています。

ただ、太陽電池は、海外の安い製品に市場を奪われ、日本の太陽電池メーカーの多くは、赤字に耐えながらなんとか事業を継続しているのが実態で、本学会を支えている太陽電池関連企業の状況は年々厳しさを増しています。

日本太陽エネルギー学会は、学会誌の表紙の右下に記載されているように、太陽光発電だけでなく、太陽熱利用、ソーラー建築、パッシブデザイン、採光、光化学、バイオマス、日射・計測、風力、海洋、小水力、エネルギー変換・貯蔵、その他各種自然エネルギーの利用を守備範囲としています。また、近年ではZEBやZEHなども含まれます。

でも、見学会などの際に「太陽エネルギー学会が、なぜ風力発電を見学されるのですか?」とか「太陽エネルギー学会が、バイオマス発電を見学されるのですか?」などと質問されて面食らう場合もあり、理事会では、「再生可能エネルギー学会に改名すべきでは?」とか「いやいや、太陽エネルギーというイメージを大切にすべき」といった侃々諤々(かんかんがくがく)の議論もなされています。

これら、太陽エネルギーを起源とする[再生可能エネルギー]は、誰しもが、普及を進めなければならないと考えますが、経済性や安定性の面からは、企業にとって必ずしも魅力的なアイテムにはなっておらず、再生可能エネルギーに関する地道な研究開発よりも、AIだ、ビックデータだ、自動運転だと、ソフト系を中心に大きな投資がなされているのが悲しい現実かと思えます。

しかしながら、エネルギー資源に乏しく、地震や津波や大型台風の襲来を心配しなければならない日

本では、必然的に他国よりもより災害に強い[再生可能エネルギー]の実用化を、しかも経済性を成り立たせながら進める必要があります。そのためには、産官学協力して[再生可能エネルギー]の研究開発を地道に、確実に進める必要があります[日本太陽エネルギー学会]が、コンプライアンスに触れることなく自由に議論できる場にならなければなりません。

私が描く、日本太陽エネルギー学会のあるべき姿は、企業や国研や大学が、自由闊達に[再生可能エネルギー]の研究開発について議論できる場として、学会誌や研究発表会や各種部会が十分に機能することです。また、[再生可能エネルギー]の明日を担う学生さんを育てる場としての機能も日本太陽エネルギー学会の重要な役割と考えます。

そのためには、会員各位に是非、本学会に積極的に関わっていただき『日本太陽エネルギー学会のあるべき姿』についてもご意見いただければと思います。

年会費半額のシニア会員の 신설、学生会員に正会員になっていただいた場合に2年間年会費半額のメリットの付与など、幅広い年齢層で、多くの方に会員になっていただき本学会を役立てていただく努力も行っていました。

すでにリタイヤされた方にも、是非シニア会員に再入会いただき(入会金不要です)、経験豊富なお知恵をお貸ししたいと思います。

また、学生の方々には、本学会で[再生可能エネルギー]の分野の第一線で活躍されている方々との生涯にわたる貴重な人脈を築いていただけたらと思います。無事に卒業された後は、是非とも正会員登録をいただき、貴重な情報の入手源としていただくと共に、論文投稿や寄稿にも協力いただいて、本学会を盛り上げていただけますようお願いいたします。

最後になりますが、1月号ということで、新たな年が会員皆様にとって、そして[再生可能エネルギー]の普及を目指す日本にとって希望に満ちた年となりますよう心より祈念いたします。

*三菱電機株式会社 先端技術総合研究所 開発戦略部 技術顧問